ドイツ語文法学習の要目

Wichtige Nabepunkte im Lernen der deutschen Grammatik

宮 永 義 夫
Yoshio MIYANAGA

山梨大学教育学部紀要　第 28 号　2018 年度抜刷

ドイツ語文法学習の要目

Wichtige Nabepunkte im Lernen der deutschen Grammatik

宮 永 義 夫
Yoshio MIYANAGA

1. はじめに

広辞苑によれば、「要目」とは「重要な項目」のことである[1)]。その意味を含めてであるが、「要目」などという、こなれない用語をあえて使用した理由は、「要点（項目）」であると、「重要な項目」であると同時に、項目に含まれる事項を要領よくまとめたサマリーのような意味を持ちうる。また「重要項目」とすると、現実にそのような差が存在することは間違いないところではあるが、全項目の中から選別された項目という意味合いになる。

意図したのは「要（hub）の項目」である。ドイツ語表題も、その意味を込めてNabepunkteとした。結節点になる項目であって、むしろ大項目の中心を占めるものではない可能性が高い。今日、文法を目的として学ぶということはない。あくまでも、言語を使用するためには、まず言語そのものを理解しなくてはならない。その「言語理解」という行為そのものが、文法学習であって、文法項目を学習するのではない。従って、重要項目に他ならないハブ項目は自ずから、文法項目の構造からはひとまずは離れた所にある。

本論の基礎には、拙著論文「ドイツ語構造把握の諸相―学習の現場ノート―（1）（2）（3）[2) 3) 4)]（以下「諸相」）がある。ここにおいて言語学習の「諸相」として10の相を紹介した。これらの相は必ずしも順序を追って出現するものではなく、複合的なものである。しかし第1相「異文化を受け入れる開かれた心を養う訓練」だけは、外国語学習の前提としての性格を併せ持つ。 そして常に関心の中心は言語そのものを扱う最も基礎の部分、第3相「言語構造を理解する訓練」である。「理解する」行為も、言語の習得においては、全て訓練という形をとるが、「理解した」結果は「知識」であって、知識は更に応用されなければならず、そのための訓練が必要になることは論をまたない。しかし「言語を理解する訓練」は圧倒的に不足している。その大きな原因は、言語をコミュニケーションツールとしてのみ捉える風潮が強いからだと考えられる。簡単な道具であれば、少しの慣れによって使いこなすことができるのであるが、言語は大変複雑な構造を持った道具であって、理解しなければ使いこなせるようなものでないことは明白であるのに、使いこなせるという幻想の中で、あるいは、使いこなせるつもりでという、「見なし」によって、コミュニケーションを疑似体験的に訓練をしようというところに問題があり、それ故、かえって言語の「学び」が滞っているとさえ言える。あるいはまた「言語の訓練」と「コミュニケーションの訓練」は、勿論重なるところがあるにせよ、別のものであるという認識がされず、「諸相（2）」で指摘した「コミュニケーション能力の専制」の状況において、「言語能力」と「コミュニケーション能力」を都合よく置き換え、代用し、すり替えている。

いずれにせよ言語はコミュケーションの道具なのであるから、その道具をうまく使用するにはコミュニケーション能力が必要であり、コミュニケーション能力は言語能力が前提であるように見える。理想的にはその通りであるが、「コミュニケーション能力」と「言語能力」の間には性質の違いがある。それは言語学習の根本に関わる問題である。

問題を分かりやすくするため、一見反対に複雑化しているようにも見える、第二外国語の学習構造によって探りたい。第一外国語とは実質的世界共通語の英語である。英語を母語とする人々も多数いるが、世界共通語の理念とすれば、全世界の人々が等しく用いることができる言語であって、いずれの人の母語でないことが、理想の共通語である。すなわち、ミニマムなコミュニケーションの場は一般的に、会話する２人のそれぞれの母語と共通語という３つの言語が存在する。自分の母語、共通語、相手の母語である。共通語を使いこなす、あるいは相手とのコンタクトをとるために必要なものはコミュニケーション能力であり、共通語の背後にある相手の母語を汲み取る力こそ言語能力である。外国語とは非母語のことであって、異文化の言語であるが、共通語も非母語であることが一般的前提であるから、外国語学習という概念の中に非母語である共通語と相手の母語という２言語が含まれている。外国語すなわち非母語学習は非母語二言語学習が基本なのである。

それでは世界が共通語化、統一言語化を目指せばよいのではないかという意見もありうるが、共通語化は文化の単一化を意味する。多様性こそが生存の鍵であって、単一化は生存が脅かされる。一方で、共通語を介したコミュニケーションは、習熟度にもよるが、母語で表現されることを仮に100％とし、共通語で表現・理解されることを50％とすれば、共通語で表現できることは50％であり、相手も同じ能力とすれば、その50％で25％の理解となる。それでも相当熟達した段階とは言えるが、かように心許ないものである。言語理解とは、このパーセンテージを少しでも上昇させることである。そのためには相手の母語を知る訓練をしなければならない。これは予め学習しておいて、熟達した段階で相手と対峙するという性質のものではない。その場で、相手の母語の特質をある程度把握する訓練でなくてはならない。これを可能にするのが、より限定的には言語学習能力と言うべきであろうが、その根本は言語能力である。

一方の母語を使用する場合は多少の不均衡が生じる。しかし、いずれにせよ言語学習は異文化理解、他者理解である。自分の使う言語は自分語であって、たとえ、同じ言語を使う者同士であっても、他者が使う言語は他者語である。自分と他者がコミュニケーションを行う際に生み出している共通理解部分が言わば共通語に当たる。このように考えれば、言語学習、あるいは二者間のコミュニケーションは、自分語と他者語の交わりであり、共通部分を利用して、あるいは共通語の助けを借りて意思疎通を図っているという構造に変わりはなく、それが外国語学習に限定されれば、二言語学習が基本になるということを意味する。

言語学習すなわち異文化理解を発動させる前提は「異文化を受け入れる開かれた心」である。柔軟な精神を持って異文化を受け入れ、自らの価値観が相対化し、変容することも厭わないが、その接触よる「価値観の変容を厭わない」という価値観は堅持する人がコミュニケーション能力が高い人であり、これまでそのような人を、一連の拙論の中ではより包括的なイメージとして、外向的な人と呼んでいる。

コミュニケーションの成立は、むしろ失敗のほうから見ると理解しやすいところがある。コミュニケーションが成り立つには、異文化のもたらす様々な価値観を柔軟に受容しながら、その「異文化を受け入れる寛容さを善とする価値観」だけは堅持しなければならない。柔軟な受容によって、寛容さを善としない価値観を獲得してしまえば、コミュニケーション（＝交流、会話、対話）は停止してしまう。交流は二者間の共通性に依拠するところが大きい。だから、共通語が重要な役割を果たすのであるが、共通語そのものがその場で作り出されるものである。共通語が作り出されやすい条件は、勿論、お互いの母語同士の共通性が高いときということになる。そして、他者との共通性ないし同質性

を容易に発見し、交流へ至る準備が直ちに整えられる資質を外向性と呼べるのではないか。ただし、同質性によってのみ繋がっていると、異質性を配慮する必要がなくなり、あたかも他者が存在しないかのような状態となり、実質的対話は成立していない。価値観の変容をもたらさないから、さらにそこに同質性の少ない第三者が加わると、新たな排除の構造が生まれる可能性がある。近頃、世の中の言語活動がプレゼンテーションとクレームばかりで構成されているような感覚（すなわち、両方とも「自己主張」であって、相手への共感を必ずしも必要としない）に陥るのは、異質性を認容しているようでいて、実は巧みに仕組まれた同質性（疑似）コミュニケーションのストラテジーなのではないかと思う。このような事態の成り行きが「諸相（２）」で触れた「コミュニケーション能力の専制」である。本来のコミュニケーションは異質性の調整であって、「能力の専制」とは、その能力のみが、人を序列化することであるが、実は、同質性による疑似コミュニケーションによる交流の成功がもたらす自己承認欲求への中毒なのではないか。

内向性とは、反対に他者の異質性に焦点を当てる資質であろう。他者が他者たる所以が異質性なのであるから、価値観の不変性が前提のようなところがある。コミュニケーションは生まれにくい。ならば自己の価値観の異質性を意識するところから始める他はない。自己は他者にとってどのように異質であるのか、比喩的に言えば、異質性同士という同質性の認識である。他者の異質性を分析し、理解することは、その中にある同質性の発見につながる。これこそが深い「学び」そのものだと思われる。同時にそれは自己の異質性の発見であり、相対的・俯瞰的視点の獲得でもある。内向性は不変的な価値観（アイデンティティ）の危機意識から他者との交流を遮断するが、他者の同質性≒自己の異質性という感覚の経験によって、困難な道ながら変容こそが自己のアイデンティティだということを感得するに至る。外向性は更にその手前、他者の異質性によって交流が阻まれ、その資質が瓦解する経験から再出発しなければならない。実に手間暇のかかることではあるが、真のコミュニケーションはこのようにしてようやく成立するものなのだという思いが強くある。筆者はこのようなコミュニケーションのあり方を「諸相（３）」においてreflective communicationと命名した。

外国語学習であれ、言語学習であれ、自分語と他者語の共通性が大きい方がコミュニケーションは容易である。それは言語能力をそれほど必要としない。一面において言語活動の不得意さ（不活発さ）を表象する内向性は異質性を特徴とし、差異を捨てきれない。自分語と他者語の構造がかけ離れたものであれば、自ずから　その異質性に目を向けざるを得ない。その大きな異質性の中に同質性を見いだし繋がることこそ、言語能力を発揮したコミュニケーションである。異質性が大きいとぼんやりと感覚的にしか理解できないものであるが、このようなものに対し不得意感を持つ者が対処する方法が、単純なパーツに分解して、なるべくディジタル的、二分法的に、on/off、有無で理解していくことである。そのような方法でドイツ語（文法）を見直せば、見えてくる来るものがあるというのが、今回の試みである。

２．音韻

１）アルファベート、母音、子音

ドイツ語の音韻に、まず文字としてのアルファベートからアプローチすることは、英語学習の経験があれば最も進みやすい道である。意識的、無意識的に英語と比較しているのであって、それを無理に忌避する必要はない。ドイツ語のいわゆるローマ字読みも、特に母音に関して、英語の被った大母音推移という現象との対比で、それ以前の、つまりラテン語に準じる発音であるので、ローマ字読みなのであって、その推移の「有無」が関係している。母音の発音を全て対応していると見るとアル

ファベート名も同名であるものが多くなる。

母音のいわば完全発音は、狭い（緊張した）長母音である。いくつかの要素の最大値を示すものがA、I、Uであって、これを３原音と名付けておく。発音の要素を抽出すると、①口（顎）の開き、②舌（特に舌先）の位置、③唇の構え、である。Aは、口（顎）を自然に開いた状態よりも更に意識して下に開ける形。Iは、口（顎）をそれほど開かずに唇を横に引いた形。Uは唇を尖らせ、顎も下へ開けようとして引っ張り合う形である。第１次の中間音がEとOで、Eは唇を横に引きながら、顎も少し下へ開けようとするポジション。Oは顎を下げたAの位置で唇を丸く尖らそうとする位置。基本５母音はいずれも、舌は下顎の動きに追随して、格納されている状態である。

母音の名は、この完全発音であり、子音の発音がほぼ同類である、BDKPQTは同名のアルファベットのドイツ語ヴァージョンということになる。母音には広い（弛緩した）母音もあり、基本的に短母音である。広短母音は、後ろに子音のある閉音節に使われ、そのことが名前に反映されているFLMNSは、勿論細かい差はあるが、ほぼ同じ名である。Rも本来これと同類であることが理解されるが、相当印象が異なるので、同種のものとして分類するのは躊躇させられる。その原因は英語に探ることができる。これらのアルファベート名はEの広短母音の後ろに子音本体が付く形になっている。広短母音は、狭長母音を基本として、その緊張を緩めることで発音するのが結局無難であるとの認識へ至った。加減によって習得するところではあるが、on/off式を貫くとすれば、広いEはIのポジションから少し顎を下に下げようと努力し（ここまでが狭いEの形）、更に唇を横に引く力を緩める、という段階を踏むとよい。ドイツ語の母音には、更にウムラウトがあり、Äはこの広いEと同じ音である。Äにのみ広長母音がある。ウムラウトにはAE、OE、UE、と記す便法があり、由来もこの合成字からであるが、必ずしもÄがAとEの合成であるということではなく、方向としてはIを目指している。Öは､Oのポジションから舌先を持ち上げる形になる。結果として、舌はEの位置あたりに止まることになる。練習としてはEを作り唇を尖らすというやり方をすることも多い。Üの場合もUのポジションから舌先を持ち上げる。反対方向ではIを作り、唇を尖らせる、という言い方になるが、結局の所、唇を尖らせることは、同時に顎を下げることを行っているから、Eあたりに落ち着く。ちなみに、Yは原則的にÜと同音である。

母音の性質を前述の①口（顎）の開き、②舌（特に舌先）の位置、③唇の構えの別に線上に並べると、
①口（顎）の開き：狭い←I－EÄ－UÜ－OÖ－A→広い
②舌（先）の位置：上←I－EÄÖÜ－U－O－A→下
③唇の構え　　：尖る←UÜ－OÖ－A－EÄ－I→横に引く、平ら

アルファベート名を子音と母音の順序とその異同で区別して上に挙げたもの以外を列挙すると、
同順異子音対応母音：CGZ
異順異子音対応母音：H
同順同子音異母音：X
別名：JVWY

これらもその由来を尋ねれば、皆関連性を有しており、歴史的変遷を辿ることは意味があることである。もう一つ、ドイツ語の文字と発音の分類において重要な線引きがある。

AEIOUYÄÖÜ（母音字）
JLMNR（有声子音字）
CFHKPQTXZß（無声子音字）
BDGSVW（有声無声交替子音字）

有声無声交替子音字は破裂音と摩擦音である。破裂音と摩擦音は、その他は無声子音字に属している。と言うことは、有声の破裂音・摩擦音を表す文字は、条件が欠けると無声化するということである。具体的には、音節末側にあると無声化する。音節末でも有声であり得るのは鳴音だけである。逆の言い方をすれば、音節頭側においては、破裂音・摩擦音は、有声・無声共にあり得るが、音節末ではその区別が失われる。

もう一つ特徴的であるのは、無声子音字の中に単独で破擦音になるC、Zが含まれていることである。双方とも同じ/ts/音である。更にその延長上に破裂音＋摩擦音であるXがある。破裂音＋摩擦音は調音点が近接していれば破擦音になるが、ドイツ語の場合、破擦音はほぼpfと/ts/音、tschに限られる。摩擦音は組み合わせ字が目立つ。前方から、f、s、sch、ch（２音）、hである。破裂音はp、t、kであるから、これらを組み合わせて、実際にはpf、ps、ks、ts、psch、tsch、kschが発音的にあり得る。hを付加するph、th、khは、原理としては破擦音と同じであるが、それぞれの有気音を表した。chも本来はkhと同音である。schもs+chという成り立ちである。基本的に、破擦音に適する摩擦音はほぼsであるということが分かる。単独文字のC、Zばかりでなく、ドイツ語において破擦音は無声に限られる（あくまでも外来語は除く、Dschungelなどのdschは、便法として使用も多い）と思われる。有声子音は母音とほぼ接触していないと無声化を起こす。気音の強さが目立ち、音節末側で起こる有声子音字の無声化（有声無声交替子音字）は、すなわち母音が後続の子音へ持続できないことにある。破裂音の前段階である閉鎖は勿論、摩擦へ向かって狭くなるだけの場合でも同様である。また、必ずしも連続していなくとも、有声子音の発音はありうるが、そのためには、子音の音節化が必要であると思われる。Lなどの鳴音は持続音であり、持続が認識されるためには声を必要とする。鳴音は本来、母音要素を含んでいるので、音節化しやすいが、有声子音は鳴音に限らず、破裂音、摩擦音であっても、母音要素を含むので、本質的に音節化する。ドイツ語は音節化が根幹的な要素になっていないと言える。そのため、有声化は母音に影響された形で起こる。B、D、Gなどは本来有声子音字とするのが一般的ではあるが、むしろドイツ語においては、「母音や鳴音の前に来ると有声化する音を表す」とするほうが実態に合っている。ただし、方言などの口語においては、音節化は頻繁に起こっている（Dirndlなど）。ドイツ語の音韻の傾向を全体として捉えると、母音ばかりでなく、子音も持続性が余り高くないことが考えられる。つまり、逆のこととして、有声無声交替が起こりつつ、音節は母音に依存するからである。破擦音は基本的に破裂音＋摩擦音と捉えられる。これは子音の連続に他ならない。前の子音は後ろの、後ろの子音は前の子音に相互依存している。お互いに母音から遠ざかっているので、無声になっている。そうなる必然性はないが、たとえ直前が母音だとしても、破裂音（に限らず）は無声化する。後ろの摩擦音は若干不思議であるが、音節の完全な切れ目でないところが要である。無声音である他はない破裂の連続として生じている摩擦音も、たとえ後ろが母音であっても、無声である他はない。

Sは有声無声交替子音字であるが、特殊なところがあり、前述のps、ksの組み合わせの時は母音の前で有声にならない（例：Psychologie、Sachsenなど）。従って、Xに含まれるs音も無声のままである（例：Examenなど）。

ここで併せて理解されることは、ドイツ語を代表する組み合わせ字の単音であるCHの特異性である。元来、前述のように、Hを伴うPH、TH、KHなどと共に、CHもそれぞれの音の有気化を表したもので、kの有気音の表記であるのが基本であるが、言語によって様々な展開を見せ、ドイツ語では主に無声硬口蓋および軟口蓋摩擦音を兼ねた表記になっている。軟口蓋破裂音のkと声門摩擦音のhを合わせた破擦音的性質を持つ表記である。ドイツ語ではHの代わりに、全ての摩擦音的要素を代表する表記のようになっているところがある。近隣言語のCH表記の表す対応音をドイツ語表記に置き換えつつ表すと、英語のCHはドイツ語ではTSCHであり、ドイツ語のSCHは、英語ではSHであり、フランス語ではCHである。ドイツ語CHは、ach音、ich音共に両言語には基本的にない。英仏両言語ではC字の摩擦音方向への変化をHの付加によっているが、ドイツ語ではHではなくCHを使っていることになる。Hは無音化の道を辿り、音節頭へ単独で現れたときのみ、声門摩擦音となることとなった。

CHの変化としては、破裂音から摩擦音、後方から前方へと捉えるのが素直だと思われる。従ってk→ach音→ich音と辿ったと考えるが、現在はich音が基本であり、ach音が従属する異音と考えるのが理にかなっている。CHの基本音、無声硬口蓋摩擦音には有声のペアと言うべき音が存在する。Jである。調音位置を共有する有声無声の摩擦音ペアは有声無声交替子音のようにも思われるが、そうであれば、ひとつの字が対応する筈である。文字が異なるうえに、全く接触がない。JはIの別形であり、半母音の表現として使われて来た。現在でもその地位は変わらないが、舌が摩擦を起こす位置にまで上昇したので有声摩擦音としての扱いとなった。本来、半母音であるので、必ず他の母音の直前にある。つまり、音節頭側にある。従って音節末側へは来ず、無声化ということもない。Jの字は音節末側で使われることはある（例：Tokaj）。その場合は母音字Iと同じ使われ方をする。

２）音節、語構成

韻律法の簡便な記述によると、ドイツ詩においては、本来古典詩の概念である詩脚として、４つの基本形が見られると言う[5)]。それによると２拍と３拍があり、揚格（強）１つと抑格（弱）で作る。これを単語など語構成の単位のアクセント（ストレス）とその位置の考察に使えるのではないかと思った。詩脚はすなわち、イアンボス：弱強、トロカイオス：強弱、ダクテュロス：強弱弱、アナパイストス：弱弱強。

強拍を語のアクセントと見なし、最も一般的なまとまりを考えたときに、２拍ないし３拍というのが語としてのサイズを反映していると考えられた。語源の問題があるが、現行の単語の構成上の中心はアクセント（以下強勢）のある部分である。最強勢は原則１つであるから、複音節の語幹は一般に考えられるが、とにかく強勢のある音節が根幹の少なくとも一部であることは間違いない。詩脚の抑格＝弱拍が象徴するのは接辞部分である。

接辞部分に注目すると、３拍までドイツ語で容認されると言うことは、２拍まで弱拍の連続を許していると考えられるので、接辞も基本的に２拍程度であろう。ドイツ語を観察すれば、実際には名詞の構成のように、いくつもの基本語彙を連結して長い語彙を形成しており、強勢は、理論上は、いくら長大なものでも、１つ（一般的には最初の基本語彙の強勢を踏襲して）あればよいので、その意味では接辞は限りなく長大になりうる。しかし逆にある程度長大であれば、基本要素に分解されうる、ということである。

語構成を考えるために、最も具体的なものとして強勢を目印にしたのであるが、そうすると抽出さ

れるのは強勢のある１拍＝１音節であって、その意味で１音節語は重要な意味を持つ。１音節語は具体的に自立して存在する音節だからである。多音節語の中に潜む核となる音節の構造を推定することができる。

多音節語の基本、２音節語を見るとき、強弱と弱強では若干の違いがある。後の弱拍は広い意味で接尾辞、前の弱拍は接頭辞である。接頭辞は語に準ずる意味・機能があるが、接尾辞には意味・機能が希薄なものがある。その典型は曖昧母音の-eである。Roseは音節で切ればRo-seであるが、他の関連語彙と並べてみると、Ros-eにも切れ目があることが分かる。この-eが何か特別の意味・機能を有していることはなさそうである。曖昧母音の-eは、複数形など、明白な機能を持つものを含めて、非常に例が多い。弱強、強弱を比べると、明らかに意味を持つ接頭辞が付いた弱強のほうが特殊である。

実際には、多数を占める１音節語が意味の中核を担っているので、２拍までで多くのことが理解される。多音節語は２音節が中心であり、強弱が基本である。３拍詩脚に見る弱弱拍も、実のところさらに分解され、その中に表層にはほぼ現れない、強弱ないし弱強が隠れている。

音節を音韻から見ると、ドイツ語には分かりやすい、特徴的な点がある。音節数は母音の数と同じであるが、音節の切れ目を確定するのはさほど容易ではない。確定されたものとして、母音で切れている、（子音）＋母音は開音節、音節末が子音である、（子音）＋母音＋子音は閉音節である。母音には、狭い（緊張）母音、広い（弛緩）母音があるが、本質的に広い母音であり、狭い音がないA、Äを除いて、開音節には狭い母音を使い、強拍は長く、弱拍は短い、ということが経験則として知られている。広い母音は強勢の有無にかかわらず、閉音節の短音に使用する。長音はいずれにせよ狭い音である。また、確定したことではないが、閉音節で長音となっている場合は、例えば名詞の複数形のように、何らかの接尾辞が付加され、開音節になる可能性があることを示唆しているのではないか、という着眼点がある（例：Tag、Tage）。音節末側の子音数に着目しているわけである。教科書にはしばしば、「アクセントのある母音の後ろの子音（字）が１つならば、その母音は長く、２つ以上ならば短い」という記述が見られる。不正確ではあるが、上記のような事柄を表現している。

開音節の語末は、例えばAutoのように、一般的には強勢がなく、従って短音ではあるが、若干長めになり、半長母音とみなされる。また短音のEは曖昧母音になることが多い。語尾は発音が特徴的なのである。またドイツ語本来の接尾辞も数は少なくないが、それでも、子音から始まる、独立した語彙タイプの-schaft、あるいは前の子音等に接着する、母音から始まる-ungのようなタイプなど、限られていて、全貌を見渡すようになるまでに果てしない時間を費やすほどではない。

-ungや複数語尾の-eなどのような母音タイプについて、補足すれば、子音タイプと異なり、音節として独立していない。実質的に母音から始まるAbendのような語彙は、最初の母音の前に声門閉鎖という現象、あるいは声門閉鎖音という子音があると言われる。従って、「ドイツ語には母音から始まる語はない」とも言われる。接尾辞の部分だけを取り出すと、声門閉鎖のない母音から始まることになってしまい、音節は形成しない。Zeitungならば音節（Sprechsilbe、話音節）はZei-tungと切れる。Zeit-ungとするのは語構成音節（Sprachsilbe）である。両方をまとめれば、Zei-t-ungのように細切れになるが、そのことは逆に完全には切れないということを示唆する。正確な表現ではないが、このようなあり方を、語幹＋接尾辞のようなものではなく、語幹＋語尾と言うこともできる。

本来のドイツ語の語尾（接尾辞）は限られたものである、と同時に、語幹も多くが１音節であり、使用されている音とその並びも、無尽蔵にあるわけではなく、ある意味、限られている、あるいは乏しいとさえ言ってもよい。そこから視野を広げてみると、いわゆる外来語なるものの輪郭が見えてくる。

本来のドイツ語の単音節語、あるいは強弱の語幹語尾からできた２音節語が見渡せるようになると、そうでない音の並びも浮き上がってくるようになる。そのような、言わば違和感のある音節は、メリハリがなく、横並びに同じような強度を持って発音される。そのような語彙も活用によって、前述のように特殊な発音となる語尾、接尾辞が付いていると、本来のドイツ語発音に戻るのである。そして、語尾に移る直前に強勢が来る。本来の接頭辞も、当然強勢はないのであるが、強勢を置いてしまうと後は弱拍とならざるを得ないので、完全に弱拍へ移行できる所までは強勢は置けないのである。それがいわゆる、外来語であると、強勢が語頭ではなく後ろのほうにあると印象をもたらしている。若干複雑であるのは、ドイツ語に入って来ると全く平板になってしまう外来の語彙も、本来は接頭辞・語幹・接尾辞の構造を持っているのであるから、多少その反映があることがある。例えば、-(t)ikなどは、おそらくその直前の要素の性質によって強勢の有る無しが決まる。Germanistikは、-istに強勢が定まるので、語尾性となり、Mathematikは不安定で、-tikに強勢がある場合が多いが、-ma-に強勢があると-tikが語尾となる。この-(t)ikのようなものを半接尾辞と呼んでみた。

ネット上にKlimaschützumsetzungsgerätfestmachstelleという、ふざけた長大語が投稿されていた。長いとは言っても、ドイツ語の場合、比較的容易に分解でき、理解すること、発音することも困難ではない。これを階層的に分解する。

[{(Klima)(schütz)}{(〈um〉〈setzungs〉)(“ge”“rät”)}][{〈fest〉〈mach〉}{stelle}]

最小区分のところで〈〉と“”の区別をしている。性質の違いがある。〈〉のほうは前側が「分離前つづり」に関連する合成要素であり、“”は前側が「非分離前つづり」に関連する接頭辞性の要素である。“”のほうが密着性が高い。最初のKlimaは一般に「気候」だが、次が「保護」なので「環境」と訳す。おおよそ、［｛(環境)（保護)｝｛(移動)（装置）｝］［｛固定｝｛場所｝］となる。確かに言葉だけでは何のことであるかは定かでないが、自転車置き場にこのような掲示がある写真であるので、「環境保護移動装置」とは自転車のことであると了解される。このような不可思議な言葉であっても、使われている語の要素は全く一般的で平易な言葉であるので、その組み合わせで想像することができる。最初のKlimaだけは日常的ではあるが、本来のドイツ語からは離れている語彙である。しかし次のschütz（単独では名詞なのでSchütz）ですでにドイツ語本来の語であるので、最初の２音節がひとかたまりであると逆算式に分かるのである。ドイツ語本来の語という認識の基は、１つ１つの部分品が様々な所で使われていることと、様々な派生語が相互にネットワークを作っていることにある。外来系の言葉は単独で存在し、派生語は勿論、膨大にあるのがふつうであるが、日常の中には一般に使われず、いちいち学習しなければならないという違いがある。

３．動詞の人称変化の分類[6)]

一般的に、動詞の最終的な語尾変化である人称変化は、直説法現在、直説法過去、接続法１式、接続法２式の４回にわたり学習するものであるが、周知のように、大きくは現在人称変化と過去人称変化の２つに大きく分かれ、そこへ口調の-e、区別の-e等が加わるヴァリエーションがある。これをま

とめて記述したいのではあるが、以下にはとりあえず、どういうヴァリエーションがあるかを列挙する形に止まっている。

１人称単数（ich）は、大きく現在形-eと過去形無語尾に分かれるが、直接法現在においてもseinがbinとなり、無語尾であるように見えるが、２人称bistとの対比を考えるとbi-が語幹であって-nが語尾である。ほぼ必須と見える現在形−eについても選択的であって、最終的には無語尾-、-e、-nのいずれかの選択とすればよいであろう。

２人称単数（du）は、-stが基本であるが、前がsなどであると、-tの場合があり、反対に口調のeを入れて-estとする場合もある。命令法があり、-、-e。

３人称単数（er）は、無語尾-、-t、-et、werdenの現在形は-d、過去や接続法には-e。

１人称複数（wir）は、-n、-en、seinの現在では-nd。

２人称複数（ihr）は、-t、-et、-d。

３人称複数（sie）は、−n、-en、-nd。

４．話法の助動詞の形式と用法の二分法的分類

話法の助動詞は、形式・活用から見れば動詞の一種であるが、動詞を補助するという意味からすると、副詞の役割に近いものということができる。助動詞は一般に他の動詞の原形不定詞等と共に使用するものであるが、併せて不定詞句を形成し、助動詞が後に来る、例：schwimmen können。この構造は「分離動詞」などとも共通し（auf|stehen）、後に来ている助動詞こそ動詞本体であって、前置される不定詞は副詞ないし目的語などの補足語の役割を持つ。共役する不定詞等との間で、動詞性（あるいは副詞性）の相対化が起こっていることが助動詞の振る舞いの最も特徴的なことである。

話法と叙法は共に、英語の文法用語ではmoodに当たり、ドイツ語ではModusである。英語のmodeでもある。英文法で言う「話法」、直接話法、間接話法の「話法」は、ドイツ語では「引用」とか「説話」などという言い方をすることもあるが、全て「話法」である。

上記のModusは動詞の変化形について扱うときには「法」と言う。「話法の助動詞」は「法助動詞」と言うこともある。定動詞には直説法、命令法、接続法がある。不定詞と分詞を合わせて、「不定法」と言う。その他、時制：現在時制、過去時制、未来時制。相：未（非）完了相、完了相。態：能動態、受動態、（中動態）。人称：１人称、２人称、３人称。数：単数、複数、の区別がある。動詞は、具体的にはこのような種別に分かれており、それぞれに応じて、意味、用法が少しずつ移動していると捉える。このことが主題化しているのがすなわち、話法の助動詞である。動詞の活用から見ると、上の種別の中で、未来時制、完了相、受動態は助動詞構文になっており、中動態というのは、現在では主に再帰表現に当たり、再帰動詞を使用するが、これは、再帰代名詞を伴う文型として捉えられる。というわけで、動詞単独の活用変化としては、３つの人称×２つの数になる６つの人称変化を直接法の現在／過去、接続法の現在（第１式）／過去（第２式）の４種のパターンで行い、２人称（単複）限定の

命令法（命令形）を加えることになるので、全部で26通りの変化をすることになる。ただし、同形のところも多い。

動詞の活用としての法の具体的な用法として、「話法」があり、要求話法、仮定話法（非現実話法）、間接話法などと分類され、これが形式としての「法」を跨いで、「引用」としては「間接話法」の他に「直接話法」、「体験話法」、「仮定話法」の下位区分として「狭義の仮定話法」、「否定話法」、「外交話法（婉曲話法）」といった「話法」になる。「話法の助動詞」とは一つ一つが固有の話法であるとも捉えられるが、これを精密に２つずつに分けるというわけにはいかないが、二分法的に、個々バラバラではなく、つながり、重なりをもって理解できるようにしたい。

言語表現の、明瞭なまとまりを持つ大きめの１ユニットは「文」である。文は基幹となる少なくとも１つの定動詞を持っているまとまりであって、論理的意味（叙述内容）と共に、語り手の内容に対する評価や感情（喜怒哀楽）などが含まれている。これを叙法要素と呼ぶ。叙法は、口調やイントネーションのような分解出来ない「超分節的」要素で表現されることもあるが、はっきりと「語」のようなユニット（単位）に分かれて、組み合わさって表現となる、分節的要素もある。

分節的叙法要素の代表的なものが、いわゆる文修飾副詞、あるいは単に文副詞と言う。「彼はおそらく車で来る。」の「おそらく」が文副詞である。このような働きをするものは副詞に限らず、助動詞や動詞自体の法（直説法／命令法／接続法）もこれに当たる。ただし、文副詞には論理的意味があり、それ以外に、叙法要素としての働きが含まれている。

「文」の働き：①外界（２・３人称）を「描写」する。②語り手（１人称単数＝ich)」の「意思（意志、意図、欲求、要求、命令、主張などの混在したもの)」と「真偽（可能性)」及び「価値（善悪、喜怒哀楽、優劣、多少、大小、快不快、好き嫌いなど）の「判断」を「表明」する。２・３人称の「表明」も「描写」される。「表明」される「判断」に叙法要素が含まれる。

助動詞の働きの一つは、動詞を助ける（修飾する）動詞という、副詞の性質を持つ。副詞と同様に助動詞も修飾する範囲によって用法の分類とすることができる。

助動詞が上述の「真偽（可能性）判断」をしている用例として、「彼はおそらく車で来る」という表現は「彼は車で来る」という「断定」（これも叙法である）に対して、「推定」という違うモードを使っていることになり、確率が下がっている。これを陳述緩和的用法と言うことがある。ドイツ語で表現すると、断定モードは単純に、Er kommt mit dem Auto. であるが、推定モードにすると、例えばEr kommt wohl mit dem Auto. とか、Er wird mit dem Auto kommen. などと言うことができる。werdenは話法の助動詞の中には普通入れないが、不定詞＋werdenは、いわゆる「未来形」であり、話法の助動詞と全く同じ扱いでよい。

ここに見られるように、叙法は、①副詞を付加する、②助動詞を付加する、③動詞自体の法（直説法／接続法／命令法）を変える、といった方法によって変換することができる。先ほどの「彼は車で来る」のモード変換を今一度日本語で喩えて見れば、「彼は車で来る『よ／ぜ』」のような終助詞タイプから、「彼は『たぶん』車で来る」の副詞タイプ、「彼は車で来る『だろう』」という助動詞タイプまで、千差万別である。

副詞は名詞以外を修飾するものを包括して言う品詞である。副詞が修飾するのは、動詞、形容詞、他の副詞と考えて、ほぼ網羅されている。その内、助動詞も修飾できるのは、文（修飾）副詞と語修飾副詞としての動詞修飾副詞である。文副詞は、それ自体を除いた文の残りの全てをまとめて修飾していることになる。その中には主語が含まれ、従って動詞は定動詞である。定動詞を含む文肢は、すなわち「（従属）節」であり、文修飾副詞とは、実は節修飾副詞である。

動詞を含む文肢は、その他に不定詞句や分詞句もあるが、動詞（原形＝不定詞）は活用して文や節を作らなければ、動詞として働かない。不定詞句は名詞、副詞、形容詞のいずれかの働きであるし、分詞句は形容詞、副詞であろう。形容詞句は名詞を修飾するもので、修飾される名詞を含めれば名詞句になる。不定詞句を副詞のように捉えれば、「分離動詞」の概念に近いものとなり、名詞句であれば、ここでは目的語である。

助動詞構文の不定詞が不定詞句の名詞用法ならば、助動詞が動詞本体で、不定詞句はその目的語である。名詞句には本来の意味での格はないと言ってもよいが、助動詞は４格目的語を取る他動詞としての性質を持っている。不定詞句は目的語として、代名詞esで受ける。ihmなどにはならないので、潜在的に４格である。このように、助動詞の用法は、主語が助動詞に係っている場合と、不定詞側に意味上係って、理念的には節を作っている場合に大きく分かれる。

話法の助動詞の用法はこのように、文修飾副詞型と本動詞型に大きく分類することが出来る。können の場合、Er kann [Klavier spielen]. ならば、「彼は［ピアノを弾くこと］が出来る」となり、können [er spielt Klavier→dass er Klavier spielt] であれば、「［彼は（が）ピアノを弾く］可能性がある」となる。余談であるが、前者は日本語で「彼はピアノを弾く能力がある」とも言え、日本語では、不定詞句や節を形容詞用法（連体形）で言えば、用法の差は少ないように見える。実際ドイツ語でも、このような日本語の表現に、より構造的に直接対応した表現もある。しかし、節か句かは大きな違いである。ドイツ語にすれば、前者はEr hat die Fähigkeit, Klavier zu spielen. 後者はEs gibt die Möglichkeit, dass er Klavier spieltのようになる。zu不定詞と節が登場しているが、erが全体の主語となっているか、節の中に収まっているかの違いが見て取れる。なお、後者は更に、Es ist möglich, dass~と言うこともできる。

話法の助動詞の意味・用法は大きく「可能性」と「意思」の２つに分けられる。「可能性」は更に２つに分かれ、「可能性付与」はdürfen、können、mögen、「可能性集束」はmüssen、sollenの受け持ちである。「意思」については、「主語以外の意思」がdürfen、sollen、「主語の意思」は、müssen、wollenの担当である。mögenはむしろ「話者の意思」である。「主語以外の意思」は、必ず文修飾副詞型であり、「主語の意思」は即ち、本動詞型であると言える。なおkönnenは「意思」に属していないが、あらゆる主体の「可能性付与」を表すことができると思われる。

「可能性付与」の１つの方向は「許可」で、「してもよい」ということであるが、「してもよい」とは「しなくてもよい」ことを含意している。この用法の代表dürfenは、「主語以外の意思」を兼ねている。「可能性を集束させる主語以外の意思」sollenとは「命令」に他ならず、「せよ」ということである。少なくとも言語上では「しなくてもよい」ことは含まれない。それが内面化して「主語の意思」になったものがmüssenである。

文副詞型の分かりやすい、真偽判断としての「可能性」用法（陳述緩和的用法）は、可能性の確率

の段階として現れる。可能性の高い方からmüssen「に違いない」99％～80％、werden「だろう」90％～70％、dürfte（dürfenの接続法第２式）「おそらく～だろう、と言ってもいい（だろう）」80％～60％、mögen「かも知れない、のではないか」70％～50％、können「かも知れない、可能性がある」60％～20％。könnenは可能性がありさえすればいいので、理論上は０％でなければよいのだが、実際には低い確率は、むしろ可能性があまりない、といった否定文の領域になってしまうので、日常の肯定文の用法とすれば、せいぜい20％ぐらいからの使用になると思われる。「可能性」用法は、その性質から言って、一対一ではないが、文副詞に対応する。「絶対」「間違いなく」「疑いなく」はzweifellosなど、「きっと」はbestimmt、gewiss、sicherなど、「たぶん」はwohl、「おそらく」wahrscheinlich、「ひょっとしたら」vielleicht（フィライヒトと発音する）などである。可能性の助動詞はとなり同士だと重なりがあり、１つおきに段階がはっきり変わる感覚がある。否定は不定詞だけにかかり、「～しないだろう」などとなる。あくまでも可能性の用法だとすれば、nicht könnenなどとなっていても、否定ではなく、「～しないかも知れない」なので、逆に、する可能性が80％ということもあり、ニュアンスは違うが、wordenの肯定文と同じような確率を表している。

なお、Er kann nicht kommen. は「彼は来られない」という意味で普通に使う。これは「事情が許さない」ということで、Er darf nicht kommen. と同じであるが、これをより個人的に表現したものである。「不可能」は「許可」系の否定として表現されており、狭い意味での「可能性」は否定がない。

「許可」は、ほぼdürfenの独占だが、これは主語の行為ではなく、主語の行為が許されているという客観的状況描写（文修飾型）である。叙法として、「可能性」は話者の評価の程度が入るが、許可は断定である。「許可」系のもう１つはmögenである。先ほどの「可能性」と「話者の意思」の連結したものである。mögenの許可系の中心用法は「認容（許容）」である。mögenは「語り手＝ichの受容」に特化しており、許可の主体は１人称単数が中心である。dürfenは、１称を包含しうるが、主体ではなく、普遍性を持ち、客観的である。dürfenは否定でき、「禁止」を意味するが、「許容」のmögenは、原則的に否定できない。

一方、Er mag kommen. は「可能性」としては「彼は来るかも知れない」で、Er kann kommen. とあまり変わらない。また、Er kann kommen. も「許可」の意味を持ち得る。「許されて、あるいは状況が許して（都合がよくて）、『彼は来ることが出来る』」ともなる。許可は可能性に直ちに繋がる。dürfenは全体の状況が許す、ということで、könnenは主語の個人的状況が許す。ここから、主語の「能力」という、別の方向性が出て来る。「意思」とは必ずしも言えないものの、「主語の可能性付与」といった用法である。mögenは話者を中心に許している「話者の可能性付与」である。

dürfenは客観状況を表しているので、不定代名詞manと相性がよい。誰にでも当てはまることを表現しているからである。Darf ich hier parken?「ここに駐車してもいいですか」は一般に当てはまる規則からいって「私も」という感じがある。Darf man hier parken? も、勿論駐車する必要があるから尋ねているわけだが、イメージとしては規則のことを訊いているので、必ずしも今ここで解決しなくてはならない緊急の問題（Ich muss hier parken.）というニュアンスは持っていない。緊急性の度合いはともかく、Kann ich hier parken? はより個人的で、「（ここに駐めたいのだけれども）いいですか」という訊き方である。規則は関係ない。もう少し一般化するとKann man hier parken? になって、あえて言えば、「（私はここに駐めたいのだけれども）（規則上／事実上）ここは駐められる所ですか」のようなニュアンスが加わる。

否定表現＋dürfenは「禁止」である。このことは実は当然ではなく、「許されていない」から「禁止」になるわけであるが、前述したように、助動詞を直接否定できるかどうかは諸説あり、易しくない。というのも形式上は、例えば、nichtを使うと、助動詞を含む不定詞句は、例えばheute nicht kommen dürfenのようになって、最初の不定詞よりnichtは前に置かれる。不定詞はそれぞれのユニットの最後に置かれるので、不定詞群は最後にかたまりになり、その中に他のものは入らない。heute kommen nicht dürfenというような形はない。だから形式上は「来ないことが許されている」となっていて、その通りの意味である可能性が大いにある。しかしほぼ「許されない」という意味で使うことになっている。このことが、あるいはdürfen理解の鍵かも知れない。nicht kommen dürfenの場合、必ずnicht（kommen dürfen）のようになっているとも捉えられる。つまり（来ることが許され）る／ない、となっているということである。これは形式上はnicht kommen dürfenであるけれども、実質上nichtはkommenを透過して、kommen nicht dürfenのように、dürfenに直結しているという捉え方をすることが出来る。このことが後述する接続法第２式、dürfteの理解にも繋がっている。

müssenの否定は両方の可能性がある。「しなければならない」という複雑な意味の否定は、①する必要がない（しなければならないことはない）、と、②してはならない（しないようにしなければならない）、つまりdürfenの否定と同じ「禁止」である。曖昧なので、①の時は表現を変えて、brauchen「必要である、英：need」の否定とzu不定詞の構文にする：Ich muss hier warten. →否定：Ich brauche hier nicht zu warten.　②の場合はdürfenの否定にすることが推奨されている。

müssenをなるべく簡単に言おうとすれば、「必要がある」が近い（要するに「必要がない」の反対である）。しかし、「しなければならない」という二重否定表現でしか表せないようなイメージが中心であることも確かである。可能性から言えば、「確実だ」「に違いない」となり否定表現を含む場合がある。許可から言えば、不作為の禁止である。許可であれば、同じことをnur dürfenでも言える。「許可」では、「出来る」ことになってしまって、「しなくてもよい」ことが含まれる。「してもよい」は「しなくてもよい」のである。可能性は一つに絞れるが、müssen「必要である」とは、その一つの可能性をしない自由を許さない。「しなければならない、しないわけにはいかない、する他はない、せざるを得ない」という言い方になってしまう。「可能性集束」の本質である。

なぜdürfenでは否定は「禁止」に定まるのに、müssenでは「禁止」と「不必要」の双方に跨がってしまうのであろうか。dürfenが文副詞型であるのに対して、müssenはsollen+wollenと見なせる「主語の意思」の本動詞型だからである。「～は確かだ」のほうは文修飾（叙法）型であるが、「する必要がある」は句修飾（文型）型が基本である。話法の助動詞は大体において、内面の精神活動の意味を持っている。ということは、１人称であれば、内面の吐露として可能だが、２・３人称では内面は分からないので、外に出た言動によって話者が判断していることになる。これは助動詞だけでなく、精神活動を表す動詞については全て当てはまる。例えばdenken「思う、考える」は、自分のことであるich denkeは「私は考える」でおかしくないが、３人称のer denktは直接「彼は考える」ということは見えていない。だから、実はer sagt, "ich denke" というようなあり方になってる。非常に拡大された意味ではこれも話法である。「彼は『私は考える』と言動で示す」を簡略に表現している。

「必要がある」では内的と外的の差があまり感じられないが、「必要を感じる」のは１人称である。必要を感じて、「決意した」ことを表す辺りまで müssenの受け持ちである。従って、この用法のmüssenは「主語の意思」である。 Ich muss hier warten. は必ずしも「私はここで待たなくてはならない」では

なく、「私はここで待つことにした」ぐらいの感じの時も多い。あえて言えば「やむを得ず」という感じがあるが、「決まっていて、他に可能性がない」ことを広く捉える必要がある。

このように、müssenの特徴は、外的客観描写と内的評価の間で差が分かりにくい点にある。人称で区別して考える必要がある。３人称のEr muss kommen. の場合、「可能性」であれば、話者の判断だから、「彼は来るに違いない」となる。ところが必然（予め決まっていること）や必要（未来へ向けて選択肢が一つに決まること）は主語の判断の場合もあり、３人称では主語の判断の表明の描写である。つまり、Er sagt, "ich muss kommen". のような意味になる。「彼は『私は来る（行く）必要がある（行く決断をした）』と表明する」ということである。もう一つは話者の判断として「彼が来ることは当然だ」のタイプになる。日本語にするとだいぶ違うが、表現方式が同一なので、これらが混在して、区別し難い。２人称では、主語の判断を描写する機会は減ると思われる。その代わり、２人称に対する話者の必要・必然の判断は命令に近いものになる。Du musst kommen. は、「来なさい」にほぼ等しくなる。よいこと、相手にとって利益になると思われることに対しては、強い推奨にもなる。

müssenとは異なり、欲求や意思を表す、sollenやwollenは内面と外面の違いがはっきりしている。主語の意思を表すwollenは１人称では「を欲する、したい」であるが、２・３人称では、日本語でも「したがる」となり、外面からの意思の表明の描写になる。外からの描写でもer will=er sagt,"ich will"であるから、主語から離れず、文修飾にはならない。しかし意思がないものが主語である場合は、比喩になり、文修飾に似た効果がある。比喩とは「あたかも意思があるもののようにふるまう」という用法である。意思のない物に意思のようなものを感じるのは、人間の働きかけに対して、自動的に応答しないときが多いので、否定が用法の中心となる。Die Maschine will nicht laufen. 「機械が動こうとしない。」 否定でなくとも、例えば非人称のregnenを使って、Es will regnen. のような表現が出来る。Es will regnen. は「（今にも）雨がふりそうだ」という意味になるが、同じような、Es muss regnen.「雨がふるに違いない」との違いは、前者は現在の状況の描写であり、後者は現在の状況から判断される未来予測である。

wollenが「主語の意思」であり、主語と必ず結びついているために、本動詞型であるのに対し、sollenは「主語以外の意思」を表し、従って外付けの文副詞型に留まる。基本的な用法／意味は「主語は～せよと言われている」ということで、命令形の言い換えと言ってもよい。細かい意味の違いは、命令を発する人称の違いである。命令法は、２人称に対する命令であるが、その命令は１人称が発している。１人称の命令・願望・要求の内容を示すことにも使われるのが、接続法第１式である。これを使って、本来３人称複数のSieに対する命令を表している。助動詞sollenは同様の働きを持ち、主語が２人称でなくとも使える。Er soll kommen. は「彼は来いと言われている」という内容であるが、３人称には直接的に命令を下すことは出来ない。１人称の話者ichが命令しているとすると、２人称の聞き手が存在している。聞き手から３人称erに向かって命令が伝達されることが要求されている。命令の発信元が特定の３人称であれば変わらないが、不特定の人々、すなわち世間／世論ということがある。この場合は「命令」という概念にはあまりなじまず、むしろ期待や常識のようなものになる。「彼が来ることが期待されている／来ることになっている」といった調子になる。ここから、「伝聞」という用法が生じる：彼は来るそうだ。

２人称が３人称に発する命令を、３人称が主語になるsollenを使って表現（描写）するということは余りない。人称の選択はあくまでも１人称が基本であり、次に２人称、そして３人称となる。２人称

に対しては意思の確認が多くなり、従って疑問文にはよく使われるであろう。Soll er kommen?と言えば、普通は「（あなたは）彼に来て欲しいか、彼に＜来させ＞＜来てもらい＞／＜ます＞＜ましょう＞か」といった意味になる。「あなたは欲するか」はしばしば「私は～しましょうか」に置き換わり、soll ich? とwollen Sie?（willst du?）は同じぐらい使われる。補足説明があれば、用法は何でもあり得るが、コンテキストが無い場合、１人称の平叙文ich sollは、３人称からの命令や決まりを叙述し、疑問文soll ich?は２人称の１人称に対する意向を尋ねている。２人称の平叙文du sollstは殆ど命令文と同じで、疑問文sollst du?は 相手の置かれた制約や条件を訊いている。３人称er sollならば、３人称に対する１人称の命令を２人称に伝達している。疑問文soll er?なら、２人称の３人称に対する意向を訊いているであろう。特定の人の命令や意思がはっきりしなければ、世間一般の意思なので、「風評」になる。Er soll reich sein.「彼は金持ちであれと言われている」と「彼は金持ちであると言われている」の差は、実はそれほど大きくない。sollenの意味領域で言えば、後者は「彼は金持ちであると決めつけられている」という感じかもしれない。前者の意味に取れるのは、１人称の意思であることがはっきりしている場合である。つまり「彼には金持ちでいてもらわなきゃ」となる。

日本語話者が困難を感じるのは、müssenとsollenの使い分けである。sollenは主語が置かれている状況、課せられている義務や任務、倫理的な要求を述べているのであって、主語がその課題を実行するかどうかは関係ない。その点では主語に許されていることを述べているdürfenと似ている。許されていると主語はkönnenである。同様にsollenなことは、主語はmüssenである。だから、「しなければならない」のはまだsollenの領域に止まっているところがあり、müssenはより積極的に「することにした」感じが入っている。

十戒の一つ、「汝殺すなかれ」はドイツ語でDu sollst nicht töten. である。「禁止」はnicht dürfenでも同じだが、sollenが使われるのは、より根本的、普遍的な倫理的禁止である。dürfenはより具体的な法的な禁止だと言える。十戒は神が１人称で、命令を発している。世間や社会的常識として「そうなっている、そうするものだ」という時にsollenが用いられ、根拠を示して、「だからこうすべきだ」の時はmüssenが使われる。sollenを根拠として、だから、否応なくmüssenだという言い方になることもある。Weil ich Arzt werden soll, muss ich Arzt werden. というような場合である。Ich soll Arzt werden.=Ich muss Arzt werden. になってしまっている。müssenがsollenの内面化になっているのである。ちなみに、du sollst とdu musstでは「しなさい」「すべきだ」ぐらいまでは同じだが、だんだんとsollenのほうは、「と言われているね」「だそうだね」の方向へ向かい、müssenのほうは「必要だ」「当然だ」「承知しているね」へ向かう。

ドイツ語では、原理的には全ての助動詞が単独で本動詞として用いることが出来ることになっているが、日常で用いられる、明快な意味の助動詞の単独用法は、まずはkönnen「出来る、能力がある、技能を持っている」、wollen「欲しい、望む、want」である。これらは語修飾がメインの助動詞である。更に、最も頻度が高い代表格はmögen「好む、好きである、like」である。「好み」を言うときには、gern＋具体的な動詞もよく使われる。Kaffeeならば飲み物なので、trinkenを使い、例えばIch trinke gern Kaffee. となるが、これと同じようにIch mag Kaffee. とも言う。こちらもgernと共にIch mag gern Kaffee. のように言うこともできる。

ところが、mögenは話法の助動詞として不定詞と共に使うと、文修飾が主になる。先に述べた「かも知れない、しても一向に構わない」である。「好み」と「可能性、認容」をつなぐイメージは「可能性

50％以上」というところにある。つまり、ポジティブな傾向にあるということである。「私はコーヒーを飲むことを好む」を表現すると、やはり中心はIch trinke gern Kaffee. である。「好む」という言い方は習慣の意味を持っている。mögenは実は習慣的な好みを表しているのではない。日本語では「私はコーヒーが好きだ」でおかしくないIch mag Kaffee. もあえて言えば「許容」であるので、「コーヒーを受け入れる」ということである。本来は「話者の意思」による「可能性付与」であって、１人称主語であることによって、話者＝主語であるため、「主語の意思による可能性付与」になっている。ここで注意しなければならないことは、mögenの意味に含まれる「意思」は、「したい」といった日本語の表現とは違って、必ずしも快であり楽しく嬉しいというポジティブさには止まらないと思われることである。「歓迎する」「構わない」「許容する」「意思（意志）を持つ」ことの中には、不快であり、必ずしも楽しい、喜ばしいことばかりに限らない事柄が含まれていると思われる。

さて、mögenは単独で、他に不定詞を必要としない本動詞用法が中心であるが、不定詞と共に使う用法が「かも知れない、構わない」である。実は否定形にすると両方の意味が重なることがある。Ich mag nicht/keinen Kaffee trinken. は、「私はコーヒーを飲まないかも知れない」と「私は飲まなくても構わない」となる。両方とも「私は飲まない」方向を指している。直接的ではないが、日本語で「私はコーヒーを飲むことが好きではない（飲みたくない）」となることを示唆している。mögenは日本語の「構わない」よりも積極的、ポジティブな意味合いだと思われる。だから、反対に否定表現は、「歓迎しない」「受け入れられない」という感じになるのであろう。ただ、前述のように「積極的に受け入れる」とは言っても、自分にとって必ずしも快適なものに限られるわけではないことに注意が必要である。

日本語の「好きである」と「～したい」の違いは、前者が習慣性、後者が一回性の未来というところにある。Ich trinke gern Kaffee. は「私はコーヒーが好きだ」と「私はコーヒーが飲みたい」の両方の意味がある。Ich mag Kaffee. は「好き」のほうが意味の中心である。Ich mag gern Kaffee. にすると、あくまでも「好き」の意味が強いが、「飲みたい」の意味も若干強くなる。否定にしてIch trinke nicht gern Kaffee / Kaffee nicht gern. でも同様に「好きではない」と「飲みたくない」の両方である。Ich mag nicht/keinen Kaffee. Ich mag nicht gern Kaffee / Kaffee nicht gern. も同じような傾向である。

肯定文の「～したい」を表すのにmögenを接続法第２式にしたmöchteを用いることになる。純粋の「～したい」ならば、wollenでよいが、これは完全に内面の問題で、丁寧さの違いということも勿論あるが、möchteにすると、更に重要なのは外との関わりが生まれて来る。Ich will etwas essen, では単に「私は何か食べたい」と欲求を表明しただけであるが、Ich möchte etwas essen. は相手に訴えている。

接続法との繋がりを考える。日常会話で頻繁に使う接続法第２式の筆頭はmöchteで、とりあえずはこれさえ知っていればよい。第２式は本来、wennなどを用いた条件文に使うものである。一般的には直説法を使えば用が足りるので、特殊な場合にのみ使用されるようになった。それが非現実話法である。「もし～ならば、～するのだが」が基本だが、条件と帰結の両方で使う。このような構造になっていないものは、そのどちらか一方のみの表現となっているか、条件節に当たるものを、句や単語で表現していることもある。だから本来、Ich möchte Kaffee trinken. は、「もし私がコーヒーを飲みたいとすれば」「私はコーヒーを飲みたいところなのだが」「私ならコーヒーを飲みたいところなのだが」「コーヒーなら私は（が）飲みたいところなのだが」といった少なくとも４種の意味を持っていることになる。しかし、条件節ならば、一般的にはwennの副文になることが多いし、前に述べたように、動詞を１位に置くことも行われるので、基本は帰結部の３例を表していると言ってよい。問題は直説法の

mögenでは否定でないと不定詞と共に「～したい」という意味では使いづらいのに、接続法第２式すると一般的になるということである。mögenの助動詞としての機能はあくまでも認容であった。だからむしろ認容用法から考えるべきではないかと思う。勿論、mögenは英語のlikeに当たり、möchteはちょうどlikeの仮定法would likeに当たると考えれば分かりやすく、簡単である。しかしmögenはやはりmayに関連していると考えるべきである。

話法（叙法）を変換するのに①副詞付加、②助動詞付加、③動詞自体の法変換、があると述べた。助動詞を更に接続法にするというのは、二重の変換をしているようなもので、手が込んでいる。助動詞は人称別、時制別、法別、肯定／否定別にそれぞれ異なる語と考えられるほど用法が拡散すると覚悟するほうがよい。

直説法から考えると、３人称でEr mag Kaffee trinken. とはあくまでも、「彼はコーヒーを飲むかも知れない（と私は判断する）」と「私は彼がコーヒーを飲んでも構わない」という意味である。接続法第２式にするとは「～ならば、私は…と判断する（のだが）／私は…でも構わない（のだが）」のように条件を仮定することである。mögenの基本的解釈は、話者の意思による状況の許可である。対応する一般的な条件とは何らかの制約である。非現実であれば、制約があって、許可されないというのが本来の意味である。

接続法第２式の典型的非現実話法はWenn ich reich wäre, kaufte ich dieses Auto. のようなものである。形はさておいて、意味は「私が金持ちなら、この車を買うのだが」である。これは「私は金持ちでないので、この車を買わない（買えない）」ということである。意図的に助動詞を使わない用例をあげたが、条件節の具体的な文言はともかく、この条件は「車が買えれば」である。助動詞的な「許されれば、可能であれば」等に集約できる。助動詞の接続法第２式は条件と帰結の二重に係っていると言える。金持ちなら→買える→買えるなら→買う、のようになっている。「判断が許される／可能であるならば、判断する（のだが）」の場合、条件の制約が不動のものならば、非現実そのものであるが、制約が解けるとすれば、聞き手（２人称）の許可が得られる場合である。これが、丁寧表現の原理である。

どんな表現も「私」（１人称）の判断だが、助動詞構文はその判断そのものがテーマになっている。文修飾型のdürfenなどでは、客観的に「私は『許される』と思う」という構造になっているわけだが、接続法第２式での条件は最終的には「許されるとすれば」になってしまうので、接続法第２式の「許可」dürfteは、厳密ではないが、「２人称の許可」だと考えて大過ないものと思う。

Er möchte Kaffee trinken. に戻れば、Er mag Kaffee trinken.「私は『彼がコーヒーを飲むこと』は構わない」から出発して「(もしあなたが許せば)、私は『彼がコーヒーを飲むこと』は構わないのだが」のような構造になっていると言える。このような仕組みで聞き手（２人称）を巻き込む表現になっている。１人称のIch mag Kaffee trinken. は、理屈上は「私は『私がコーヒーを飲むこと』は構わない」、もしくは、「私は『私がコーヒーを飲むかも知れない』と判断する」という意味になるが、自分の意思に対する許可や、可能性の判断は、殆ど意味を持たないと思われる。Ich möchte Kaffee trinken.「(もしあなたが許せば)、私は『私がコーヒーを飲むこと』は構わないのだが」に至ってようやく一般的な用法となるわけである。

dürfenの接続法第２式、dürfte「おそらく…だろう」もそのように使う。「…と言ってもいいだろう」

のように捉えればよいが、２人称の許可と捉えると、「もしあなたが許せば、～だ」となっている。Er dürfte 50 Jahre alt sein.「彼はおそらく50才だろう（50才と言っていいだろう）。」更に意味の差異を追求すれば、相手の同意を求めつつ、彼の年齢を50才と推定している場合と、同じく同意を求めつつ、（特に実年齢を知っている場合は）実年齢にかかわらず、彼の態度、外見などから50才に見えるという表明の場合に大別される。このような意味の用法だから、「許されなければ」というのはない。そもそも「可能性」モードには否定はなかった。nicht kommen dürfen は nicht（kommen dürfen）だったが、dürfte の場合は dürfte...（nicht kommen）になる。むしろ dürfen そのものの性質として、否定による「禁止」は「可能性集束」であり、文修飾型であると、sollen と同じ「命令」となると捉えた方がよいかも知れない。「来るな」＝「来ないことを命ずる」。

人称によって意味が左右される代表がいわゆる未来形の werden である。本来の意味は「～になる」だから、１人称としてはもう決まっていることを述べて「～します、～するつもりです」になる。２人称では、相手の行動を規制して「～するのです、～しなさい」になり、３人称で、１人称の観察結果としての推定になるわけである。１人称の話し手としてはすでに決定事項であり、そうなると思って（確信して）いる。本来、「～すること（よう）になる／なっている」という意味だからである。その他の場合としては、２・３人称の言動の描写、１人称の意思・意向が薄ければ、１・２人称でも推定になり得る。

ドイツ語では未来形はたまたま不定詞＋werden となっているが、英語では伝統的に shall と will の役割である。これらはドイツ語では sollen と wollen であり、助動詞は全て、行為そのものはこれからなされることに対応する。ということは、どれもが未来であり、助動詞は何を使っても未来形になり得る。ドイツ語の sollen と wollen は、より必然性・意思の意味が強く、許可系では、過去の取り決めの結果という意味合いを含んでいて、純粋未来であるよりは、やはり現在の意味が強くなっている。

「～になる」という意味の werden は起動相という動詞の種類（アスペクト）を代表している。一言で言えば、「始まる」という意味を含んでいる。一般に動詞の現在形は、①すでに始まりまだ終わっていない継続「～している」（現在進行形）と、②過去において行われて、未来においても行われるであろう習慣、不変の繰り返し、と共に、③まだ始まっていない完全に未来に属する一回性の事柄も表す。起動相の動詞の現在形は、③の意味、つまり未来である。そのことを最も純粋に表すのが werden である。だからこそ、不定詞＋werden であらゆる動詞を起動相にし、すなわち未来の出来事にしている。３人称の「推定」も、意味上は現在の推定であるが、原理的には同じで、現在は現れておらず、将来に明らかになるという含みを持っている。

あらゆる動詞は未来の要素をそれ自体が備えているが、済んでしまったことを表す完了相をそれ独自で表す動詞はない。全ての動詞を完了相にするためには、完了形にしなくてはならない。werden を中心とした「～になる、～し始める」という意味を持つ起動相の動詞の振る舞いは、ドイツ語の完了形を理解する鍵にもなる。起動相は現在形が未来である。ということは完了形が現在のことを表していることになる。

以上、ドイツ語学習の結節点となり重要でありながら、等閑視されがちな項目のいくつかのトピックについて論述した。

註

1）新村出（編）　広辞苑　第四版　岩波書店　p. 2636　1991.

2）宮永義夫　「ドイツ構造把握の諸相―学習の現場ノート（1)」.『山梨大学教育人間科学部紀要』，第11巻，pp. 306-313，2009.

3）宮永義夫　「ドイツ構造把握の諸相―学習の現場ノート（2)」.『山梨大学教育人間科学部紀要』，第12巻，pp. 269-276，2010.

4）宮永義夫　「ドイツ構造把握の諸相―学習の現場ノート（3)」.『山梨大学教育人間科学部紀要』，第13巻，pp. 256-263，2011.

5）ロベルト　シンチンゲル　他（編）『独和広辞典』，三修社，p. 1689，1989.

6）この項は以下の論考を改訂したものである。
宮永義夫「文法学習を問いなおす―事実学習を超えて―」，５．話法の助動詞の包括的理解、『山梨大学教育学部紀要』第27号，pp. 225-235.

この論考は長年触れてきた無数の教科書の記述の経験に基づいている。

特に次の３冊の書籍を優れた参考資料として座右に置き逐次参照した。

中山豊　中級ドイツ文法―基礎から応用まで―　白水社　2008.
中島悠爾　平尾浩三　朝倉巧　必携ドイツ文法総まとめ　白水社　1993.
国松孝二（編者代表）他　小学館　独和大辞典［第２版］　コンパクト版　小学館　2000.